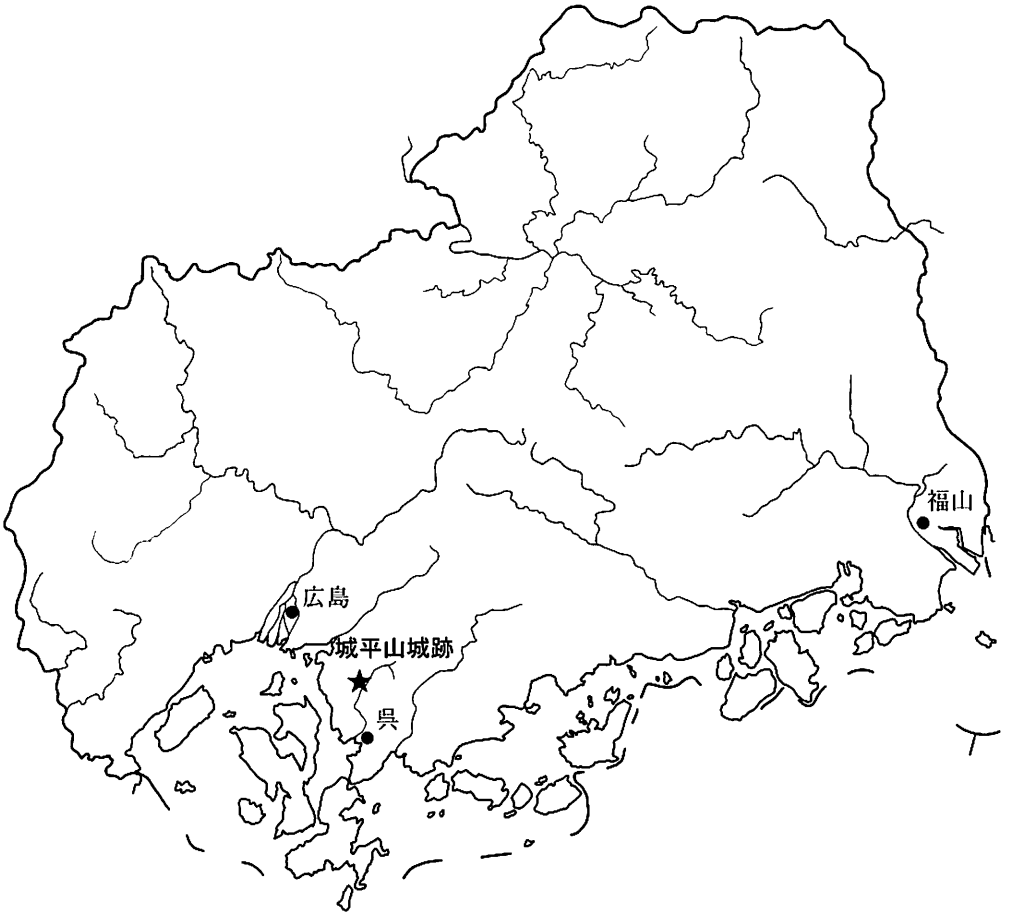
財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第29集

城平山城跡

2009

財団法人　広島県教育事業団

城平山城跡



2009

財団法人　広島県教育事業団

a　近景（南上空から）

b　全景（北上空から）

例　言

1　本書は，平成19(2007)年度に発掘調査を実施した，都市計画道路焼山押込線街路改良事業に係る城平山城跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，広島県呉地域事務所から委託を受け，財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。

3　発掘調査は，渡邊昭人・山澤直樹・大上裕士が担当した。

4　出土資料の整理・復元・実測・写真撮影等は，山澤・渡邊・木村和美が行なった。

5　本書は，山澤が執筆・編集した。

6　本書に使用した遺構の表示記号は，次のとおりである。

　　ＳＫ：土坑　　ＳＸ：性格不明遺構

7　第１図は，国土交通省国土地理院発行の１：50,000地形図「呉」を使用した。

8　第１図における遺跡の位置は，『広島県遺跡地図Ⅱ』を参考にし，当該図書刊行後の現地確認等の結果により，一部を変更した。

9　第９図は，呉市入船山記念館所蔵の絵図で，当館の許可を得て撮影し，使用した。

10　本書に使用した方位の北は，平面直角座標系第Ⅲ座標系北を示している。

調査風景

目　　次

Ⅰ　はじめに ……1
Ⅱ　位置と環境 ……2
Ⅲ　調査の概要 ……8
Ⅳ　遺構と遺物 ……10
Ⅴ　まとめ ……15

巻頭図版目次

a　近景（南上空から）
b　全景（北上空から）

挿図目次

第１図　周辺主要遺跡分布図（１：50,000） ……3
第２図　周辺地形図（１：2,000） ……8
第３図　遺構配置図（１：200） ……9
第４図　ＳＸ１実測図（１：20） ……10
第５図　調査区土層図（１：80） ……折込
第６図　ＳＸ２実測図（１：40） ……12
第７図　ＳＫ１実測図（１：20） ……13
第８図　平坦面２出土遺物実測図（１：２） ……14
第９図　安芸郡焼山村絵図 ……17
第10図　野間氏城塞網想定図 ……19

図版目次

図版１ａ　遠景（南上空から）
　　ｂ　遠景（東から）
図版２ａ　土橋状遺構調査前（西から）
　　ｂ　土橋状遺構・ＳＸ１（西から）
図版３ａ　ＳＸ１（西から）
　　ｂ　土橋状遺構調査風景（北西から）
図版４ａ　平坦面１調査前（南から）
　　ｂ　平坦面１（南から）
図版５ａ　平坦面２調査前（南西から）
　　ｂ　平坦面２上層（南西から）
図版６ａ　平坦面２上層（南から）
　　ｂ　平坦面２下層・ＳＸ２（南から）
図版７ａ　平坦面３調査前（北西から）
　　ｂ　平坦面３（北西から）
図版８ａ　平坦面４調査前（南東から）
　　ｂ　平坦面４（南東から）
図版９ａ　ＳＫ１土層断面（北西から）
　　ｂ　ＳＫ１遺物出土状況（北西から）
　　ｃ　ＳＫ１（北西から）
図版10ａ　平坦面２出土遺物
　　ｂ　同左（裏側）
　　ｃ　ＳＫ１出土遺物

Ⅰ　はじめに

呉市の北部に位置する焼山は，名前のとおり山に囲まれた町である。呉市沿岸部や広島市，東広島市へ通勤可能なベッドタウンとして開発が進み，現在約３万６千人が生活する呉市第２の町となっている。町を縦断する県道31号線（「呉平谷線」と呼称されている。）は，呉市中心部と熊野を結ぶ主要道路であり，そのうち焼山区間が調査対象となった「焼山押込線」である。呉市中心部と焼山を結ぶ道路はほかにもあるが，カーブが多い上に道幅も狭いことから利用する車は少なく，必然的に呉平谷線の交通量は増えることとなり，通勤の時間帯以外でも交通渋滞が起きている。こうした課題を解決するため，かねてより新しい道路が求められていた。今回の事業は，新道を敷設し道路を整備することで慢性的な交通渋滞を解消し，地域生活をより豊かにすることをめざすものであり，東広島・呉自動車道開通に合わせた交通事業の一環といえる。

この事業に先立ち，平成８(1996)年８月２日付けで，広島県呉土木建築事務所（以下「土木建築事務所」という。）から呉市教育委員会（以下「市教委」という。）あてに「文化財等の有無及び取扱いについて」の協議書が提出された。これを受け，市教委・広島県教育委員会（以下「県教委」という。）が現地踏査を行なった結果，城跡の一部と思われる平坦面を確認し，同年12月に市教委はその旨を土木建築事務所に回答した。その後，平成17(2005)年11月29日付けで，広島県呉地域事務所（以下「地域事務所」という。土木建築事務所の組織改変。）は，県教委あてに文化財保護法第94条に基づいて「埋蔵文化財発掘の通知」を行なった。それに対し，翌年３月23日付けで県教委は地域事務所に「要発掘調査」の指示を出した。

発掘調査については，平成19(2007)年２月26日付けで地域事務所から財団法人広島県教育事業団（以下「事業団」という。）あてに調査依頼があった。事業団は同年３月16日付けで地域事務所に受諾の回答を行ない，同年４月16日から５月26日まで発掘調査を実施した。

本報告書は，以上のような経緯のもとに行なった発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，また地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

なお，発掘調査及び報告書作成にあたっては，広島県呉地域事務所，呉市教育委員会，呉市史編纂室，呉市入船山記念館，呉市昭和公民館，円福寺及び地域の方々に多大なご協力・ご指導をいただいた。記して，感謝の意を表します。

Ⅱ　位置と環境

城平山城跡は，広島県呉市焼山西三丁目に所在する。呉市は，北は安芸郡熊野町，西は広島市安芸区，東は東広島市に接している。南は瀬戸内海に面しているが，灰ヶ峰（標高 737 m）をはじめとする山々がせり出しているため，平坦地は少ない。この灰ヶ峰と休山を結ぶ山系が南に延びて半島を形成し，その両脇を二河川と黒瀬川が流れる。主な平野部は，これらの河川による堆積と先人の干拓新開によって形成されており，商店や工場，住宅が立ち並んでいる。山陽道を外れた地理的環境から，近代以前は歴史の脚光を浴びる機会が少なかったが，海岸線が屈曲に富む上，南に隣接する倉橋島や江田島が防禦的地形をなし，戦時中は軍港都市として発展した。戦後は，軍港時代の技術を活かした造船や鉄鋼の主要都市として栄えたが，産業の変容や他国の成長によって不況が続いた。近年，周辺地域を合併し，大和ミュージアムなど歴史と文化を生かした新しい観光に力を入れるとともに，東広島・呉自動車道等の交通整備を進めている。

本城跡のある焼山は，灰ヶ峰の北東側に広がる町である。北部には平坦地が広がるが，標高 300 ～ 400 mの山地に囲まれた起伏に富む地形となっている。この山塊の間を，熊野・苗代を水源とする二河川が南北に蛇行しながら流れ，渓谷地形を形成している。人々は二河川の両岸に形成された狭小な低地と，それに向かって延びる丘陵斜面に新興団地を築いている。

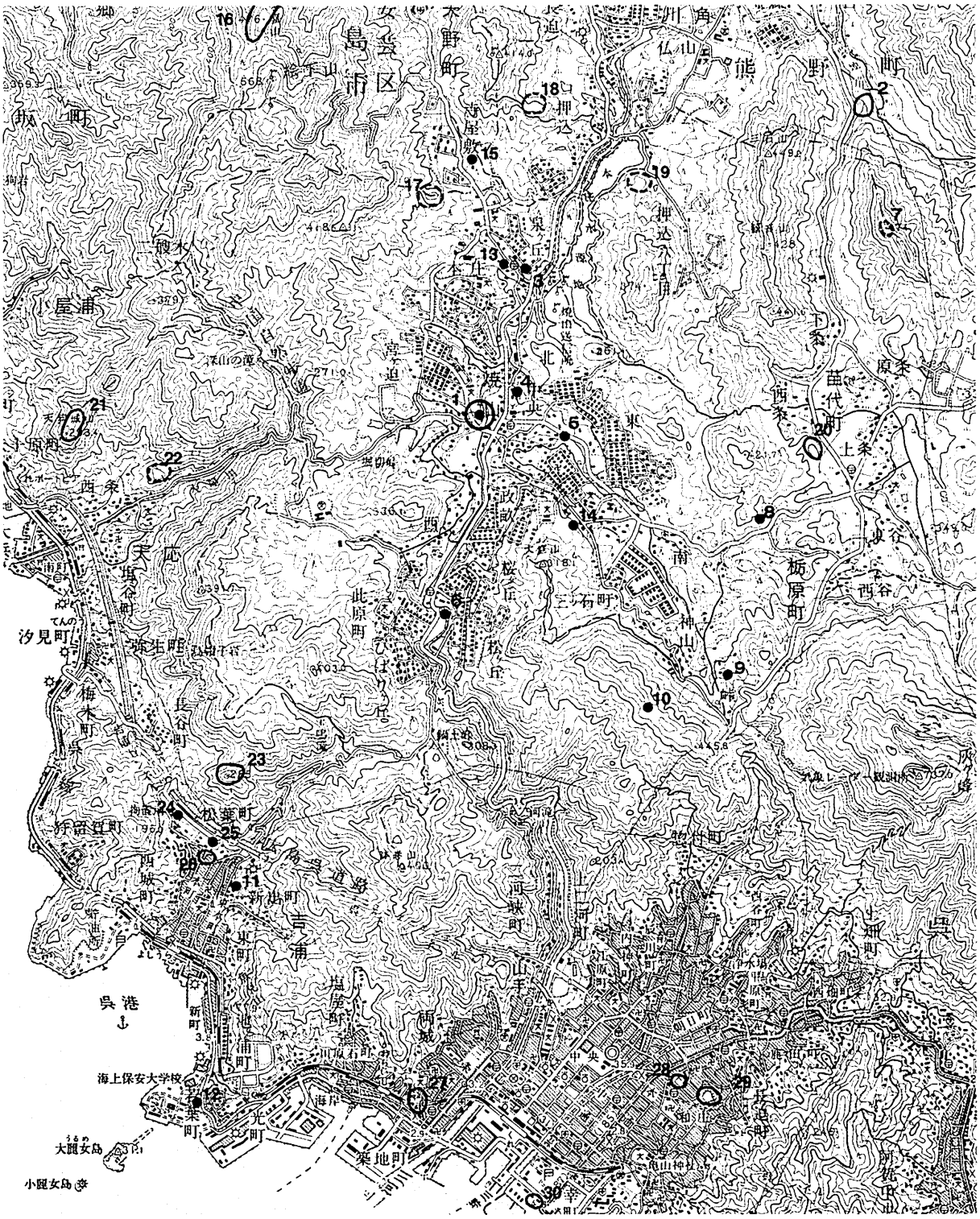
本城跡も，絵下山（標高 568 m）から南東に向かって派生した山々の丘陵尾根先端に立地する。平地との比高は約 15 mで，焼山の町を見渡すことができる。遺跡の南側を望むと，眼下に二河川が流れている。北側はさらに小高くなっており，墓苑として利用されている。遺跡のそばに円福寺，その東方には高尾神社が控え，さらに遺跡の眼前が熊野，郷原，呉・吉浦，天応へと分かれる分岐点となっていることから，交通の要衝に位置する町の中心地的な場所といえる。町内には本城跡以外にも様々な時代の遺跡が存在し，呉の歴史を語る際には外せない重要な地域である。ここで，焼山を中心に呉市及びその周辺の主要な遺跡と歴史に触れていきたい。

旧石器時代

市内では，島嶼部において遺跡が認められる。阿賀の南方に位置する情島の南部で，安山岩・流紋岩・水晶などさまざまな石材を使ったスクレイパーやナイフ形石器が表採されたほか，蒲刈の大巻平遺跡でもナイフ形石器が出土している。焼山周辺では，二河川の上流にある才の神遺跡で有茎尖頭器が出土している。

縄文時代

呉市における縄文時代の遺跡は，広の芦冠遺跡を除くと山間部に集中している。芦冠遺跡では，縄文後期の土器や女性を象った土偶片が出土している。山間部では，焼山の東方にある郷原遺跡の試掘調査で縄文土器片や姫島産黒曜石の石器が出土している。焼山においても，泉遺跡と野間園遺跡で有茎尖頭器，仲間が原遺跡で石槍が出土したほか，本遺跡の東方に位置する高尾神社[(1)]の拝殿前からも縄文後期の土器片が出土している。住居跡などの遺構を伴わないため，当時の様相



1 城平山城跡	2 才の神遺跡	3 泉遺跡	4 高尾神社出土地	5 仲間が原遺跡	6 野間園遺跡
7 藤ノ木山出土地	8 戸石山遺跡	9 小菅遺跡	10 神山1号貝塚	11 本町遺跡	12 池浜古墳
13 竜が畝遺跡	14 貝吹原遺跡	15 寺屋敷跡	16 矢野城跡（保木城跡）	17 マミガ城跡	18 古城跡（城山）
19 古城跡（陣城跡）	20 掃部城跡	21 天狗城跡	22 塔岡城跡	23 茶臼山城跡	24 野間氏屋敷跡
25 大福寺跡	26 堀城跡	27 有崎城跡	28 堀城跡（堀ヶ迫城跡）	29 杉迫城跡	30 城山城跡

第1図　周辺主要遺跡分布図（1：50,000）　※ 地図中の◌は場所や範囲が推定

を探るのは難しいが，焼山を中心に狩猟を行なっていた痕跡がうかがわれる。

弥生時代

弥生時代の遺跡も，主に山間部に集中している。いずれの遺跡も遺物の出土のみで，調査による遺構の確認はされていない。出土遺物の一例として，戸石山遺跡では壺，小菅遺跡では高杯の頸部や壺の底部，藤ノ木山の山頂では穿孔のある器台が出土した。遺跡の位置から，焼山の辺りでは縄文時代よりさらに山側で生活するようになったと考えられる。土器以外では，沿岸部吉浦の本町遺跡やその近くにある本町貝塚などから磨製石斧が出土した。なお，呉市では本町貝塚以外にも多くの貝塚が見つかっているが，時代を特定できるものは少ない。しかし，標高の高い神山1号貝塚などは，古来より海と山に住む人々の交流があったことをもの語っている。

古墳時代

古墳時代に入ると，対岸の情島，倉橋島や蒲刈など島嶼部を中心に古墳が出現する。ほとんどが直径10 m未満の円墳で，埋葬施設は横穴式石室と箱式石棺が多い。近辺の沿岸部では，吉浦の池浜古墳がある[2]。これは，海軍の用地買収に伴って荒神社を移築する際に，境内の地下から船形石棺が見つかったもので，墳丘の規模や形状は不明であるが，棺内から勾玉や提瓶などが出土している。一方，山間部では郷原の山中で確認された火神嶽古墳（主体部は横穴式石室）がある。焼山では古墳や集落跡は認められないものの，貝吹原遺跡や竜が畝遺跡で須恵器の破片が出土しており，古墳時代の生活痕跡が確認できる。

古　代

沿岸や島嶼部を舞台に製塩・漁業・海運など多様な活動を展開していた海民たちも，中央集権国家に与することになる。律令制における地方制度（国―郡―里）の整備に伴い，呉浦と島嶼部は安芸国安芸郡となり，海民たちは画一的に「戸」に編成され，50戸をもって「里」とされた。藤原宮跡出土木簡には「安芸国安芸郡□里／倉橋部□□調塩三斗」とあり，海民を編戸した「海里」の成立が確認できる。霊亀元(715)年，海里は「安満郷」へ改称されたと考えられ，『和名類聚抄』に安芸郡の郷として「安満郷」「養濃郷（現在の安芸区矢野とその周辺が想定）」「船木郷」の名がみえる。この船木郷の所在地には呉市惣付町舟木が比定[3]されており，呉沿岸＝船木郷の杣人による製材と，島嶼部＝安満郷の海民による造船技術が結合し，安芸国の遣唐使船建造がなされたものと考えられている。その後，海民の定住化に伴って安満郷・船木郷・養濃郷などの律令制的な郷制が解体し，呉浦や倉橋島など浦や島を単位とした国衙領の行政区となったが，11世紀末より荘園化の波が押し寄せ，呉浦は鳥羽法皇によって皇室領安摩荘の一部として立荘された。やがて，当時呉浦に並存していた石清水八幡領「呉別府」が拡充し，呉浦全体が石清水八幡領「呉保」となり，この呼称が中世を通じて「呉」の公称となっていく。なお，この時期の焼山に関する記録はないが，船木郷・養濃郷のいずれかに属する山間集落であったと推測される。

古代の遺跡として，奈良時代の古墓が確認された蒲刈の初神遺跡などがあるが，その数は非常に少なく，時期不明とされている出土遺物の再検討が求められる。焼山に隣接する矢野町の寺屋敷跡[4]では，石垣や土檀・礎石などが確認されており，出土した布目瓦や伝承から平安前期にさか

のぼる密教寺院跡と想定されている。その東方丘陵にある聖神社は『安芸國神名帳』に記録された古い小祠であり，古代における焼山区域の宗教的風土を探るには外せない。

中　世

鎌倉幕府の成立に伴い安芸国にも東国武士が派遣された。しかし，承久の乱では芸備の武士は朝廷方についている。乱平定後，幕府によって安芸国に新補地頭が次々と派遣され，守護として下向した甲斐武田氏が広島市の銀山城に本拠を置いたが，鎌倉時代後期に幕府の支配が弱まると，陸では悪党，沿岸部では海賊の動きが活発になる。とりわけ，芸南地域や芸与諸島を活動舞台とした伊予衆が北上し，安芸国の沿岸や島嶼部に土着していく。『豫章記』によれば，伊予守護の河野通直が仁木義尹から伊予を奪回する時，呉から二神・南方の二氏がはせ参じている[5]。この時，敵対した仁木方伊予衆の中に山本氏・野間氏・多賀谷氏の名前が見え，先の二氏が去った呉方面に敗走した。その後，彼らは領家や地頭に対抗してきた旧来の在地勢力と結合し，沿岸部や島嶼部の荘園・公領を占拠していったと考えられる。やがて，防長二国の守護大名大内氏が安芸国に進出し安芸東西条や呉を支配下に置くと，山本氏を中心とする呉衆や能美衆・蒲刈衆は大内氏に臣従する海賊衆＝「三ヶ島衆」として各地に転戦している。一方，文安２(1445) 年に足利義満より保木城[6]を与えられた野間氏[7]は，大内氏の麾下に入ることで勢力を拡大した。大永３(1523) 年には安芸侵攻を展開する尼子経久方に付き，矢野を拠点に坂・吉浦・焼山へと勢力を広げると，呉衆を駆逐して呉の城山に「千束要害」を築き，小早川氏や呉衆と抗争した。しかし，尼子氏の衰退に伴って野間氏の勢力も落ち，弘治元 (1555) 年に毛利元就によって滅ぼされた。やがて，中国地方全域が毛利氏の支配下に置かれることになる。

中世の遺跡では，沿岸島嶼部・山間部ともに多くの城跡がみられる。山間部では，本城跡をはじめ矢野城跡（保木城跡）・古城跡（陣城跡）・掃部城跡などが確認できる。保木城跡は，矢野を見下ろす発喜山（標高 466m）に立地する野間氏の本拠であり，約 800 mにわたって３つの郭群が立ち並ぶ。付近の山々にも郭などを配し，一大軍事拠点を形成している。そこから南東にある小山の頂部（焼山と矢野の境目）には，マミガ城跡[8]の存在が伝わっている。ここは保木城の後背地に当たり，付近に寺院（寺屋敷跡）を配していることから，保木城の堡塁であった可能性が考えられている。陣城跡は，本庄水源池の北東にあったとされているが，所在地には諸説がある[9]。ここは野間領の境目に当たり，野間氏の主力部隊が毛利軍によって突破された場所との伝承もある。なお，近くには『芸藩通志』に「野間氏家人，渡辺貞吉居所」と記録された古城跡（城山）もある。掃部城跡は，苗代の丘陵先端（標高 310 m）に立地する。頂部の郭は最も大きく，北に向かって郭４つが並ぶ。郭群の南側に深さ７ｍの堀切，東西に多くの竪堀・土塁や堀切など，軍事機能が高い。『芸藩通志』に「掃部山　苗代村にあり，野間掃部所居」とあるように，歴代「掃部」を名乗った野間氏の城であり，呉・広・郷原・黒瀬に通じる重要な拠点として機能していたと考えられる。なお，焼山の南東にある神山もかつての地名が「陣ノ山」であり，神山神社の裏山に武具にちなんだ地名が残っていることや呉方面へ抜ける主要道が通っていたことから，陣山城の存在が唱えられている。

一方，沿岸部では天狗城跡・茶臼山城跡・堀城跡・城山城跡・杉迫城跡・堀城跡（堀ヶ迫城跡）などが知られている。天狗城跡は，海に面した天狗城山頂部（標高 293m）にあり，岩山や絶壁の多い天然の要害をなす。記録が少ないため詳細は不明であるが，絵下山から見下ろせる位置にあり，すぐ南東の甲手山山裾に野間氏の塔岡城跡が想定されていることから，野間氏の見張り砦であった可能性が高い。茶臼山城跡は，吉浦湾に面する茶臼山頂部（標高 285 m）に立地し，呉から広島が一望できる。岩盤を削平した郭とそれを取り巻く帯郭から成り，自然石を利用して北側を土塁状に残し，東側に虎口をつくっている。眼下の丘陵の先端部（標高 57 m）には，２段の郭と周囲に堀を廻らせた堀城跡が立地し，共に吉浦野間氏の城跡といわれている。城山城跡は，「千束要害跡」とも呼ばれ，休山から呉湾に延びる尾根の先端（標高 20m）に位置し，当時は海中の水軍城を呈したといわれる。尼子氏の安芸侵攻に伴い野間氏が呉地方を侵略し，この城に拠った。杉迫城跡は，丘陵先端を利用した城で，戦国時代は海に面していた。『芸藩通志』に「山本甲斐所居」とあるように呉衆・山本氏の居城と伝えられるが，現在は宅地となって全壊している。堀ヶ迫城跡は，杉迫城の一部を接収・補修したものと推測されており，毛利隆元から呉・音戸の普請を命ぜられた小早川隆景が，城番として末永氏を配置したと考えられている。現在は「城山」の地名を残すのみで，全壊している。

以上，焼山とその周辺を中心に見てきたが，野間氏に関わる城跡が多く，野間氏の支配下に置かれた歴史が影響しているといえる。北部の郷原や東部の阿賀・広になると大内氏や多賀谷氏などの城跡も見られ，勢力図を異にする。残念ながら，後世の攪乱などによって崩壊した城跡も多く，呉市域における中世城館の全容を明らかにするには，今後の発掘調査と共に史料や伝承などの多角的な分析や新たな現地踏査を行なっていかなければならない。

なお，城跡以外では，吉浦野間氏の菩提寺といわれる大福寺跡や野間氏屋敷跡などが知られているほか，茶臼山城跡そばの茶臼山貝塚をはじめとする中世貝塚が沿岸部に確認されている。焼山では，堂屋で土師質の燈明皿や鍋の破片，鉄釘が出土している。神山の伊賀敷でも積石塚が確認[(10)]され，中世の信仰生活を伝えるものとして注目された。

近世以降

徳川家による幕藩体制が確立し，呉市域も安芸藩の一地域として浅野氏の管理するところとなる。『芸藩通志』の和庄村の項には，荘山田・宮原村を含め「三村を呉庄と称す」とあり，「呉」という地域名が受け継がれていることが確認できる。宮原村の港は船が往来する「呉町」として発展し，呉の平野部も広と共に開拓が進んでいった。その後も，半農半漁の村落として時代の波に同調しながら歴史を刻んでいくが，海軍・肝付少佐の測量調査により軍港として脚光を浴び，「呉」は急速な近代化の波に覆われることとなる。

近世の歴史を語る石碑は数多く分布するが，遺構を含めた遺跡は少ない。平成に入り郷原で石畳が調査[(11)]され，郷原～広を結ぶ近世街道が確認できた。近代以降になると，呉市特有ともいえる軍港時代の痕跡が数多く残っており，後世に残すべき「負の文化遺産」として見直されつつある。

註

（1）高尾神社がある小高い丘の北西斜面には巨大な岩が存在し，現在も信仰対象となっている。太古より岩倉として信仰の地となっていた可能性もある。

（2）横路や西川原石町でも石棺を確認したとの記録があり，大麗女島や警固屋も出土遺物から古墳の存在が想定されているが，いずれも詳細は不明である。なお，神山にある神山神社も，改築の際に地下より鉄刀や土器が出土したとあるが，その所在は不明となっている。

（3）他説もあるが，対岸の倉橋島が遣唐使船建造の中心地とされていることや，呉の地名起源を船の製材＝「樽木（くれき）」に求める説などから，この地に造船用の製材集落があった可能性が高いといわれる。

（4）寺屋敷は矢野と焼山の境にあるが，地勢的にみると焼山の生活圏にあるといえる。石垣や石列のほか，石畳も確認できており，古くから押込～矢野の主要道が通っていたことが想定される。なお，矢野の長慶寺は，この地にあった密教寺院が野間氏落城の際に焼失し，後に改宗・移転したものとされている。

（5）下向井龍彦「中世の呉」『館報・入船山』創刊号　1986年
　『豫章記』は中世に伊予で活躍した河野氏の来歴を記した文書で，14世紀末に成立したといわれる。

（6）保木城は，熊谷蓮覚によって築城されたといわれる。蓮覚は，南北朝争乱に当たって一族が足利尊氏に味方する中で唯一公家方につき，建武2(1335)年に武田氏の東上を防ぐため保木城に立てこもったが，最後は武田氏によって討たれた。彼の行動の背景として，かつて矢野の属する安摩庄が八条女院領であり，時を経て後醍醐天皇に伝えられていることから，公家方につく在地武士や百姓が多かったことが想定されている。

（7）野間氏は足助氏を祖とし，尾張国内海から入部したといわれる。その一方で，その水軍的な性格から伊予衆に出自を求める説もある。

（8）天和4(1684)年に初版ができた矢野村古絵図「国郡志御編集ニ付下志らべ書出絵図」に記載されているが，記録された史料がないため不明な点が多い。「呉市の古代―中世遺跡分布図」によれば，現地調査で郭らしき平坦地や石垣の配列を確認しているが，公式な調査は行われていない。

（9）陣城跡の位置は，広島県中世城館遺跡総合調査による。「呉市の古代―中世遺跡分布図」によれば，道を挟んだ北側（現在は団地）に神社跡と郭跡らしい平坦地を確認し，そこを陣城跡と見なしている。

（10）1990年，広島大学考古学研究室の古瀬清秀教授によって調査された。時期は鎌倉時代から江戸期までが想定されている。

（11）1996年度，呉市教育委員会によって調査が行われている。

参考文献

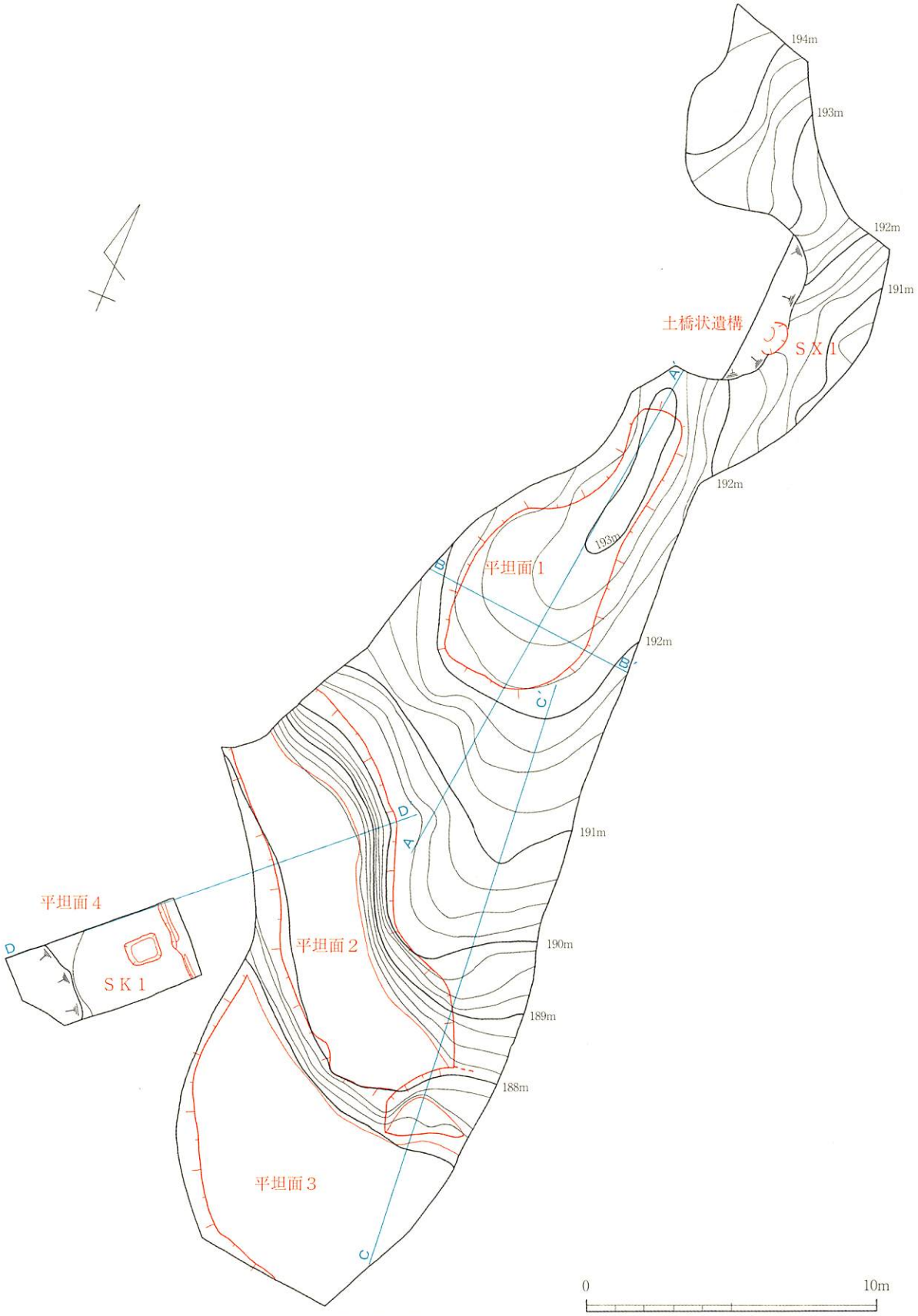
芸備郷土誌刊行会『復刻　芸藩通志』第2巻　1973年
角川書店『角川日本地名大辞典　34　広島県』1987年
平凡社『日本歴史地名大系第35巻　広島県の地名』1982年
広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅱ』1994年
広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第1集　1993年
広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第2集　1994年
呉市役所『呉市史』第1巻　1956年
呉市役所『呉の歴史』2002年
呉市役所『呉の歩み －呉市制100周年記念版－』2002年
呉市役所『呉の歩みⅡ 英連邦軍の見た呉 －増補改訂版－』2006年
郷土出版社『図説　東広島・竹原・呉の歴史』2001年
下向井龍彦「中世の呉」『館報・いりふね山』創刊号　呉市入船山記念館　1986年
中邨末吉『呉及びその近郷の史実と伝説』第4輯　1980年
横田若水「昭和地区出土資料」1991年
呉市昭和西公民館「焼山「字堂屋」から出土した中世遺物覚書」
古文化の会「呉市の古代―中世遺跡分布図」1985年
矢野町『広島県矢野町史』上巻　1958年
小林浩治『目で見る矢野町史　社寺編』　1983年
広島県安芸郡熊野町『熊野町史　通史編』1987年

Ⅲ　調査の概要

城平山城跡は，二河川の西側丘陵の尾根上（標高 184 ～ 194 m）に立地し，焼山の町を見渡すことができる。東は郷原，西は天応，南は呉・吉浦，北は熊野へと通じる交通の要衝に位置し，特に天応への道は本城跡の眼下を通っている。調査前は山林となっており，最下部の平坦地は「かつては畑だった」との話もあった。

調査の結果，４つの平坦面と土橋状遺構１基・土坑１基・性格不明遺構２基を検出した。平坦面の配置は北側の最高所に平坦面１があり，そこから南に向かって平坦面２・３・４と続く。いずれも建物等の痕跡は確認できなかった。平坦面１の北側には，尾根筋を堀切状に掘り込み東側に通路を確保した土橋状遺構がみられた。さらに，その土橋状部分の中央にＳＸ１，平坦面２・３間の斜面東部にＳＸ２，平坦面４にＳＫ１を検出した。出土遺物はＳＫ１を中心に近世の土器類がほとんどで，平坦面２上層・平坦面４・ＳＫ１は近世以降の造成と確認できた。それ以外の平坦面１・２下層・３及び土橋状遺構は，城跡に伴う可能性が高い。

第２図　周辺地形図（１:2,000）　※ 網目は調査区



第３図　遺構配置図（１：200）

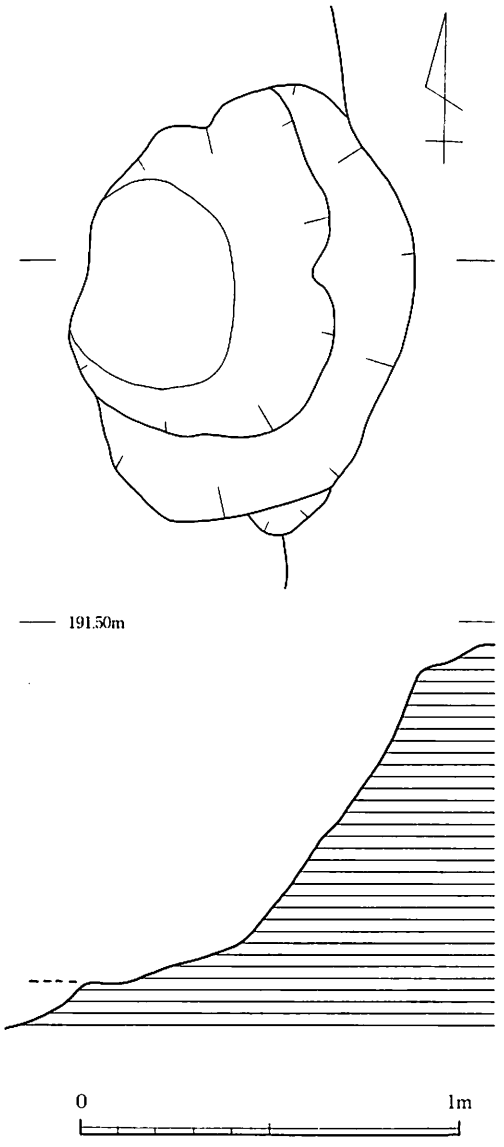
Ⅳ　遺構と遺物

① 検出遺構

土橋状遺構（第３図，図版２・３ａ・ｂ）

土橋状遺構は，平坦面１の北側背後に位置する。ここは，尾根を北西から抉ったような地形から堀切と考えられていたが，ほとんどが後世の攪乱や自然流失を受けており，わずかに東端が土橋状に残存するのみであった。実際，調査前まで山道が通っており，現代でも土橋の役割を担っていたといえる。表土を剥いで土橋状部分の西斜面に確認した掘り込みの堆積土を堀切埋土と捉え，これが東側まで貫通するものと推測して調査を進めたが，東側は地山面が残っていたため土坑状の掘り込み（ＳＸ１）になり，完全な堀切にはならなかった。

土橋状部分は長さ約５ｍ・幅約１ｍで，20度ぐらいの坂道となってカーブを描きながら南北の稜線につながる。流失が激しいため厳密とはいえないが，堀底との高低差は北側が3.5ｍ，南側が2.5ｍ，土橋状部分が0.9ｍになる。西側の堀切状の掘り込みと東側の急斜面に挟まれた幅の狭い土橋になっていたと想定されるが，検討の余地もある。なお，遺構に伴う出土遺物はないため，時期を特定することはできない。

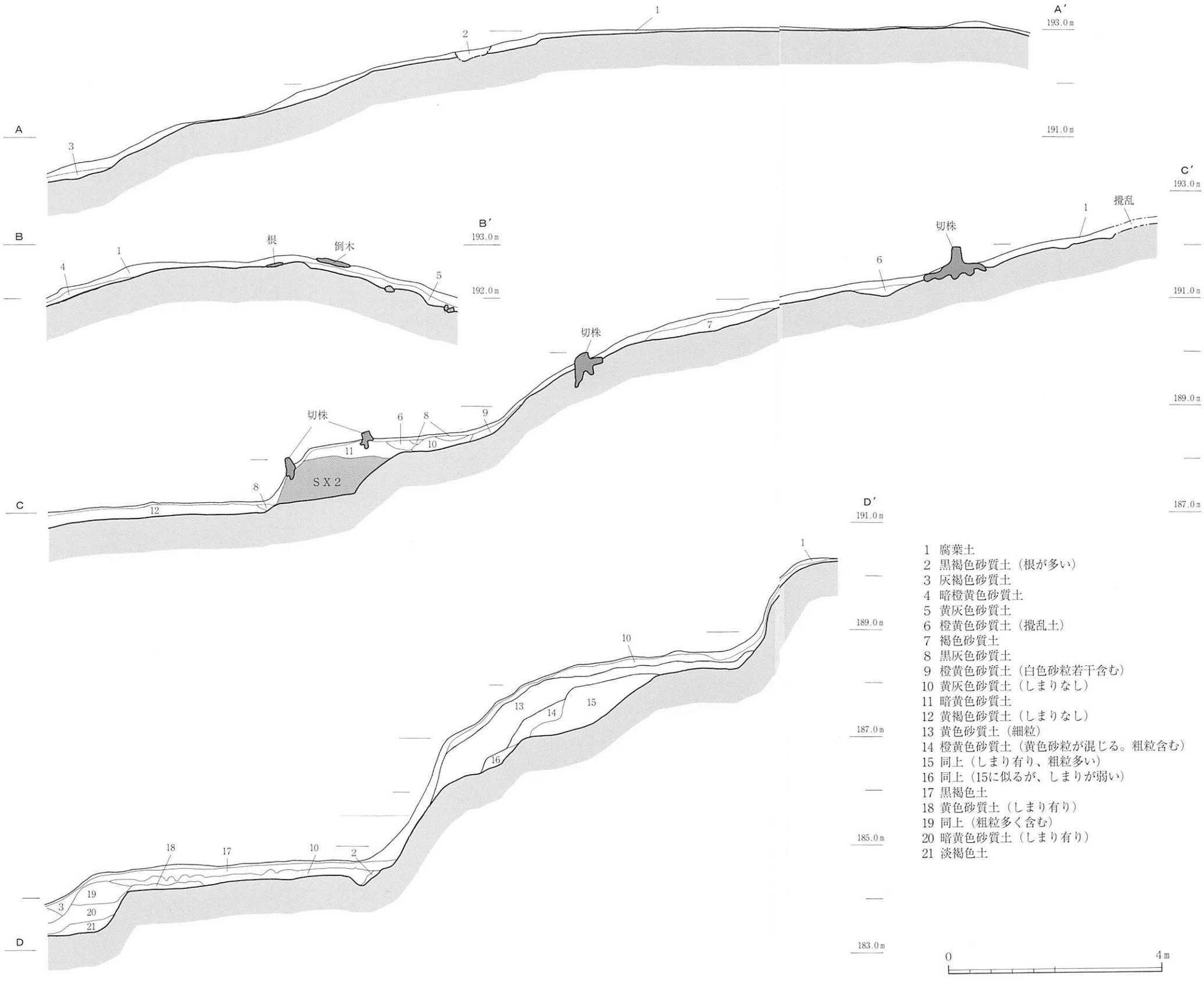


第４図　ＳＸ１実測図（１：20）

ＳＸ１（第４図，図版２・３ａ）

ＳＸ１は，前述したように土橋状部分の中央部西側に位置する。平面形は楕円形に見えるが，西部が掘削で失われているため，不明である。現状規模は直径0.85～1.2ｍだが，実際はそれ以上になる。深さは約0.9ｍで，内壁は凹凸が目立つ。底部は円く，壁と底の境はあまり明瞭でない。

土層は，底部より橙黄色砂質土，褐色砂質土，灰褐色砂質土が落ち込むように堆積している。堆積土からは出土遺物がなかったため，時期は不明である。残存状態も悪く，土坑がたまたま土橋状部分に重複したものか，あるいは土橋状に残すための掘り込みか，判断できる材料に欠けており，性格を明確にできない。



1 腐葉土
2 黒褐色砂質土（根が多い）
3 灰褐色砂質土
4 暗橙黄色砂質土
5 黄灰色砂質土
6 橙黄色砂質土（撹乱土）
7 褐色砂質土
8 黒灰色砂質土
9 橙黄色砂質土（白色砂粒若干含む）
10 黄灰色砂質土（しまりなし）
11 暗黄色砂質土
12 黄褐色砂質土（しまりなし）
13 黄色砂質土（細粒）
14 橙黄色砂質土（黄色砂粒が混じる。粗粒含む）
15 同上（しまり有り、粗粒多い）
16 同上（15に似るが、しまりが弱い）
17 黒褐色土
18 黄色砂質土（しまり有り）
19 同上（粗粒多く含む）
20 暗黄色砂質土（しまり有り）
21 淡褐色土

第５図　調査区土層図（１：80）

平坦面１（第３図，図版４）

平坦面１は，本城跡の北部に位置する。ここは最高所に当たり，標高は 192 ～ 193 mである。北側背後は堀切を思わせる掘削部があり，北へ続く尾根から独立した景観を呈する。頂上部であるため表土の流失も激しく，地山面が露出した場所もあった。平坦面の周縁が低くなっているため，地表はなだらかな斜面となり，平坦面の境界は明瞭でない。さらに，北西側が流失しているため平面形は明確にしがたいが，堆積土層や地表観察から長さ 11 m，幅４～ 4.5 mの長方形であったと推測される。現状での面積は，約 36 ㎡になる。

堆積土層は，ほとんどのところが厚さ２～ 20 ㎝の腐葉土層のみで，その下は花崗岩風化土の地山面となっているが，東緩斜面では約 10 ～ 20 ㎝の黄灰色砂質土，西緩斜面では約 10 ㎝の暗橙黄色砂質土の中間層が確認できた。中央部の地山面はほぼ平坦となっており，ここが遺構面と考えられる。東西が緩斜面となっていることから，上記の中間層は盛土の可能性がある。なお，城跡に伴う建物や溝などの痕跡及び遺物は確認できなかった。

平坦面１から２ｍほど北東の斜面で，炭化物や焼土層を検出した。焼土層は，60 ㎝四方ぐらいの範囲にわたり，厚さは 10 ㎝ほどである。さらにその東にかけて，焼土や炭化物交じりの黄褐色土層が広がっていた。これらの焼土や炭化物は平坦面１から崩れ落ちてきたものと思われ，平坦面１北部で火の使用があったと推測される。

平坦面２（第３図，図版５・６）

平坦面２は，平坦面１から南へ約５ｍに位置する。尾根に沿って延びる平坦面１に対し，尾根に直交する平坦面である。標高は約 188 ｍで，平坦面１よりも４ｍ低い。北西部は急斜面となって流失しているが，現状から長さ 13 ｍ，幅３ｍ以上の細長い形状の平面形が推測される。現状での面積は，約 35 ㎡になる。背後は 55 ～ 80 度の急斜面で，上方への切岸となっている。切岸西部の上方には抉ったような地形がみられるが，山道の造成によるものと考えられる。平坦面３に向けても 60 ～ 70 度の急な切岸となっているが，高さは約 1.2 ｍほどである。

土層観察によると，南に向かって延びる尾根の斜面をＬ字状に削り，地山面を平坦気味に加工している。さらに南東側に続く斜面になる地山上には，地山の岩を砕いた砂礫を多く含む橙黄色砂質土が堆積しており，その上面は先の地山面と連続した水平面となっていた。その状況から，この面が遺構面であり，削り出した土を斜面下方に盛ることで平坦面を広くしたものと考えられる。この盛土は平坦面の西部にかけて厚く盛られていた。建物跡等の痕跡や遺物はなく，平坦面の築造時期は不明である。

この平坦面の上には厚さ 20 ～ 80 ㎝ほどの黄色砂質土が堆積しており，上面を水平気味に保っていることから，後世において平坦面全体に盛土を施すとともに東部に盛土をして新たに平坦面を拡張したと考えられる。建物跡等の痕跡は確認できなかったが，盛土層から石板１点と近世陶磁器の破片が出土していることから，新しい平坦面は近世以降に造られたといえる。なお，平坦面の東端は，後世に造られたＳＸ２によって大きく掘削されている。

ＳＸ２（第６図，図版６ｂ）

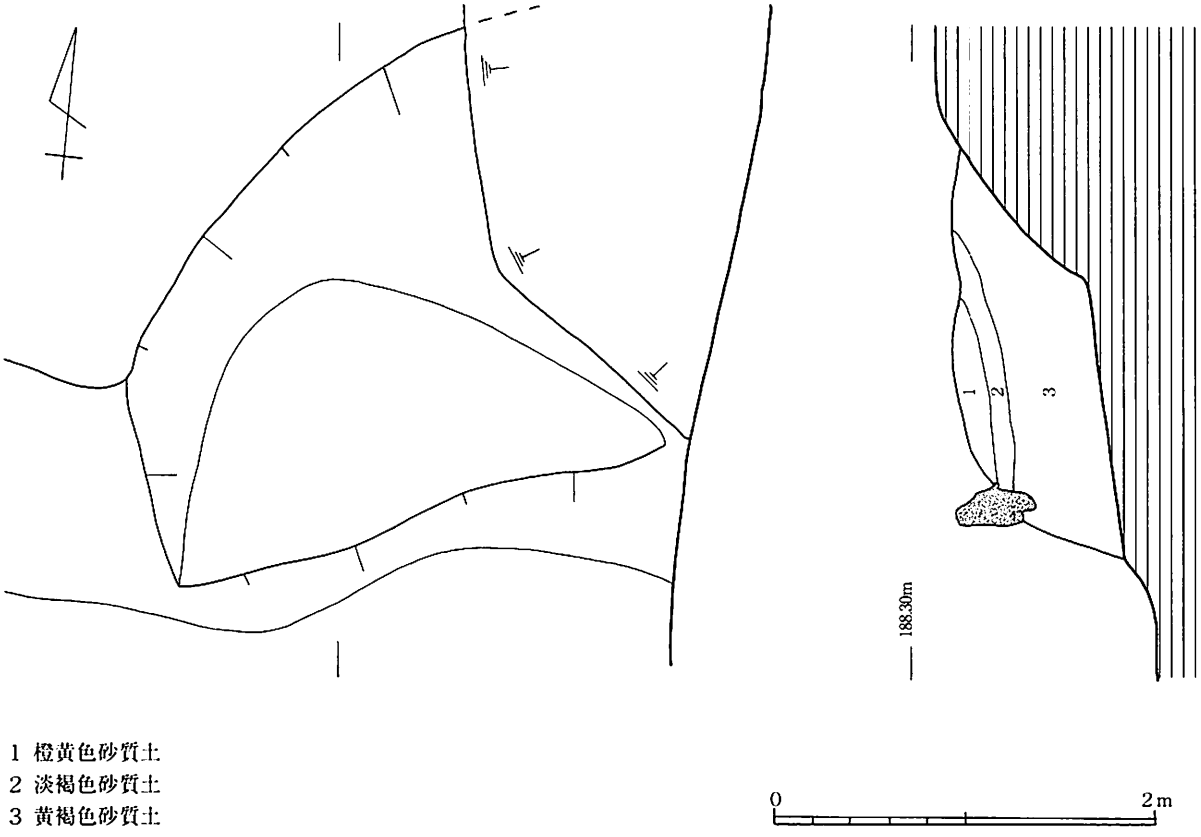
平坦面２の南東端に位置し，標高は約 187 ｍである。東半分は木根による攪乱が激しく，平面形は不正形であるが，直径３ｍ以上の半円形を呈する。

土層観察によると，平坦面２と同様に斜面をＬ字状に削り，地山面を平坦気味に整形している。堆積土は腐葉土層・暗黄色砂質土層の下に橙黄色砂質土層・淡褐色砂質土層・黄褐色砂質土層がみられる。いずれの層も平坦面３に面したところが断面となっており，後述するように平坦面３を畑として再利用する際に掘削されたものと考えられる。最下層で近世陶磁器の破片が出土したことから，近世以降に造成されたものといえる。残存状態も悪く，遺構の全容は不明であるが，形状や位置から上方への通路となっていた可能性もある。

平坦面３（第３図，図版７）

平坦面３は，平坦面２の南東に位置する最大の平坦面で，平坦面２と同じく尾根に対して横向きに延びる。標高は約 187 ｍで，平坦面２よりも１ｍほど低い。南端は，後世の急斜面工事によって掘削を受けている。また，北西辺は平坦面４と接しており，この部分は平坦面４の造成時に掘削された可能性も考えられる。検出した平面形は台形状を呈し，現状規模は長さ 9.5 ｍ，幅６ｍである。面積は，約 52 ㎡になる。

土層は，厚さ４～ 15 ㎝の腐葉土層の下に，黄褐色砂質土層，花崗岩風化土の地山が続く。地



1 橙黄色砂質土
2 淡褐色砂質土
3 黄褐色砂質土

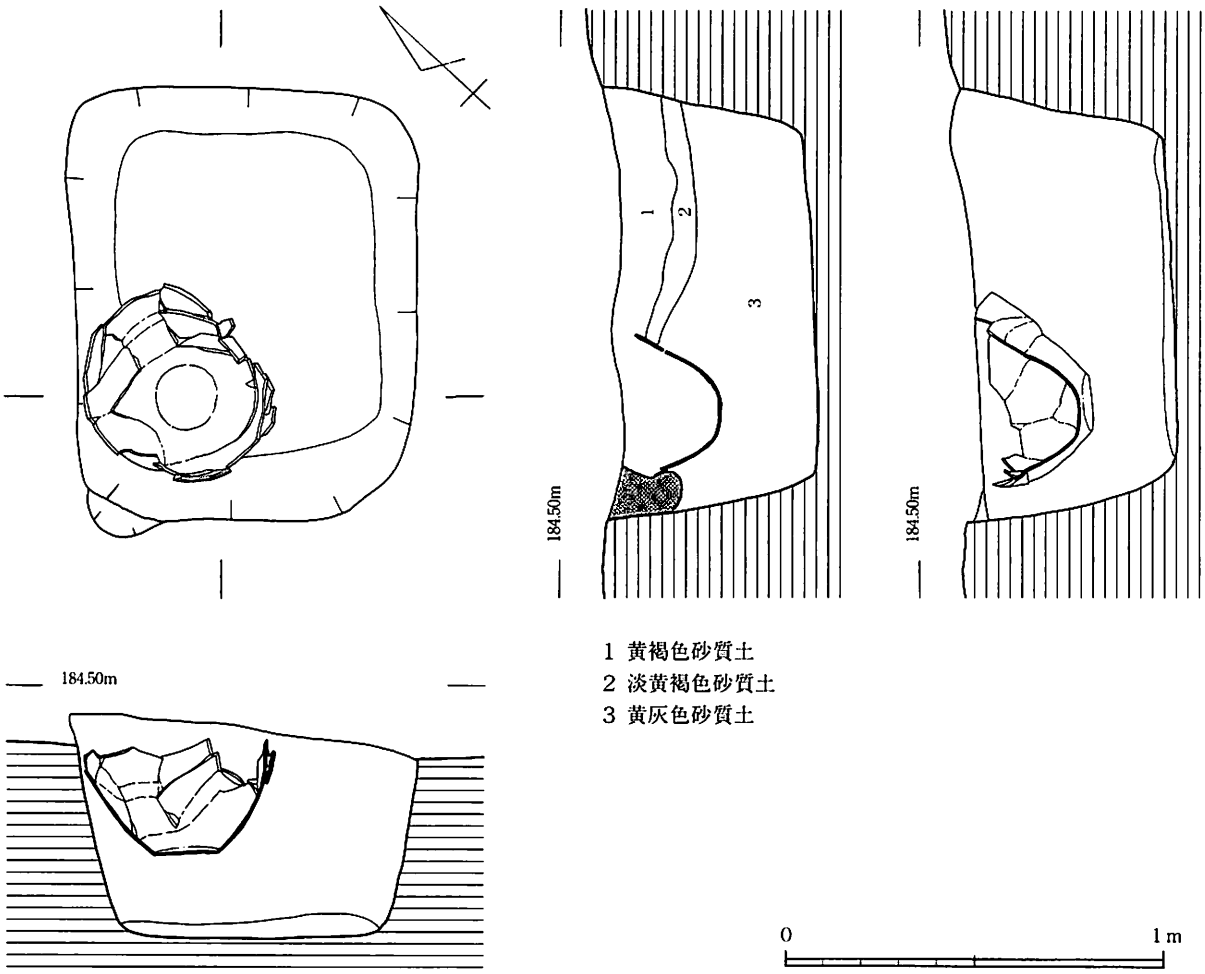
第６図　ＳＸ２実測図（１：40）　※ 網目は切り株

山は水平に近い平坦面となっていることから，盛土を施さず地山を削って整形しただけの平坦面といえる。建物跡等の遺構は確認できず，出土遺物も近世陶磁器の破片数点を表採したのみで，平坦面造成の時期は特定できない。なお，黄褐色砂質土層の北側で溝状に掘り込まれた痕跡がうかがえることから，後世において地山面に土を盛って整地し，畑とした可能性が考えられる。

平坦面４（第３図，図版８）

平坦面４は，平坦面３の西側に位置する最も低い平坦面である。標高は約 184.5 mで，平坦面３より約２m低い。北西―南東方向に長い長方形プランを呈しており，南側は急斜面工事で大きく掘削されている。地元では「昔は畑だった」との話もあり，新しい時期に造成された可能性があることから，トレンチ調査を行い，その結果によって調査方針を決めることにした。

トレンチの土層観察によると，地表には腐葉土層の下に厚さ 15 ～ 30 cmの耕作土と考えられる黒褐色土層が広がっている。さらにその下は，厚さ 10 ～ 30 cmの黄灰色砂質土層，岩質の地山面が見られる。地山面はほぼ平坦であるが，平坦面３に比べると凹凸が見られ，荒い加工であった。地山面の北端には，畑の排水に使用したと考えられる溝が斜面に沿って掘り込まれている。また，



第７図　ＳＫ１実測図（１：20）　※ 網目は根による撹乱土

中央部では近世の土坑（ＳＫ１）を検出した。遺物は，平坦面が南の急斜面にむかって窪んでいく地点の黄色砂質土層から土師質土器の鉢や近世陶磁器の破片が出土した。

以上のことから，平坦面４は近世に構築され，近現代まで畑として利用されていたことが推定される。

ＳＫ１（第７図，図版８・９）

平坦面４に入れたトレンチの北東部に位置する，北東―南西方向に長い長方形プランの土坑である。地山面において検出しており，上部を削られている。現存規模は長さ約 1.2 m，幅約 0.9 m，深さは約 0.6 mで，底部北側がやや高くなっている。

土層は，３層に分かれ，上から黄褐色砂質土，淡黄褐色砂質土，黄灰色砂質土が堆積していた。最下層が最も厚く，その上面は固く締まった状態であった。

土坑内には，完形に近い土師質土器の水鉢が西隅に置かれ，埋土からは多くの礫に混じって陶磁器・瓦の破片，砥石１点が出土した。水鉢は土坑底部よりも浮いた状態で，礫もきれいに積んだような状況ではなかった。出土した陶磁器から近世以降につくられたものといえる。ただし，もとからあった土坑が畑の造成によって削平されたのか，畑につくられていた土坑が耕作中に削平されたものか，特定は難しい。

② 出土遺物

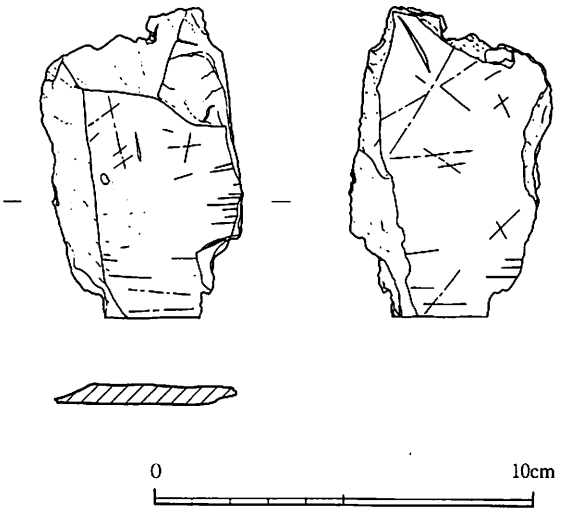
今回の調査では，ＳＫ１を中心にコンテナ１箱分の遺物が出土した。

土器・瓦（図版 10 ｃ）

ＳＫ１より土師質の鉢，近世以降の陶磁器の碗・皿・徳利や瓦の破片が出土したほか，ＳＸ２や平坦面３・４でも近世以降の陶磁器の破片が出土した。

石製品（第８図，図版 10 ａ・ｂ）

平坦面２上層を形成する盛土の中から石板１点（第８図）が出土した。大半の周縁が破損しているが，平面形はほぼ長方形を呈し，現状で長さ 8.2 cm，幅 5.1 cm，厚さ 0.5 cm，重さは 30.3 ｇである。薄型の石板で，石材は粘板岩である。なお，ＳＫ１でも，東広島市に産する吉川砥石１点が出土している。



第８図　平坦面２出土遺物実測図（１：２）

V　まとめ

城平山城跡は，『日本城郭大系』に「野間氏関係の城であろうか」とあり，中世の城跡とされている。広島県中世城館遺跡総合調査[(1)]では，地表面観察により４つの平坦面と堀切の存在を確認していたが，その後最下段の平坦面よりさらに下方の平坦地が城跡に関わる可能性が考えられ，それを踏まえて調査を行なった。調査の結果，当初平坦面１－２間に想定されていた最小の平坦面が自然地形によるものと判明したが，「昔は畑だった」との話があった面を加えた４つの平坦面と土橋状遺構１基，土坑１基，性格不明遺構２基を検出した。ただし，いずれの平坦面でも建物跡などを思わせる遺構は確認できず，ほとんどの遺物が城跡よりも新しい近世以降のものであった。

ここで，今一度検出した遺構を検討し，本城跡の実態や歴史的意義を探ってみたい。

本城跡の構造と造営時期

まず，土橋状遺構は城跡の最北部に位置する。遺構に伴う西側の掘り込みは，他所に比べて流失が余りに顕著で，遠くから望いても稜線がブツリと人為的に切られたように見える（図版１）。そこで，これは堀切を意識して稜線を掘削しつつも，東寄りを通路として土橋状に残したものであり，平坦面１にとっては丘陵から独立させ背後からの防御をなすと共に，北側丘陵への連絡路を残したものと判断した。県内の調査例では土橋を堀切の中央に設けたものがほとんどで，本城跡のように土橋を掘り込みの脇に設けるのは特異である[(2)]。堀切の片側寄りに置いた数少ない類例として広島市安芸区の三ツ城跡[(3)]があり，当城跡では堀切の西端を掘り残して土橋としている。しかしながら，全体的にみて城の規模や構造，土橋の意図などが大きく異なるため，共通性を見出すのは難しい。東広島市で調査された福原城跡[(4)]は，本城跡と同じく比高の小さい小規模な城跡で，堀切の西側に郭へと繋がる通路を確保している。しかしながら，これも堀底道が上方の郭へと繋がるという形態であり，明らかに異なっている。本城跡の場合，流失した西側にも土橋状部分と同じ形状が続く浅い堀切であった可能性も考えられ，今後の類例に期待したい。なお，土橋状部分にあるＳＸ１が土橋状にするための掘り込みか，あるいは土坑状の遺構が偶然に重複したものか，明確でない。先の三ツ城跡の土橋も，西側の中央部が抉られたようになっているが，意図的に掘ったものか自然流失によるものかはっきりしていないため，類例の積み重ねによる検証が必要であろう。

平坦面１は，最高所に位置する中心的な郭（郭１）と考えられる。周囲が緩やかな斜面のため，区域は曖昧である。出入口も明確でないが，出口は北側の土橋状遺構へ通じていたと考えられる。北側背後の掘り込みが土橋状通路を確保しているため完全な堀切にならない点や切岸もないことから，防御機能は低いといえる。

平坦面２は，平坦面１から少し離れて位置する。背後は急斜面で，上方への切岸的な役割を担っている。平坦面３との高低差は小さく，小規模な切岸となっている。土層観察によって２回にわ

たる造成が確認できたが，新しい遺構面からは近世以降の遺物が出ているため，古い遺構面が郭（郭２）と考えられる。南東部に位置するＳＸ２は，出土遺物から近世以降の造成といえる。なお，郭１への通路は確認できていない。

平坦面３は，最も面積が広い。本来は北西側に延びていた可能性もある。平坦面４との境は急斜面となっているが，平坦面４の造成時期を踏まえると切岸とは確定できない。土層から後世の開墾が確認でき，地山面が郭（郭３）と考えられる。

平坦面４は，最下部に位置し，平坦面３を抉ったような外観を呈する。トレンチ調査で確認した土層や遺構面の状況，出土遺物などから，この面は近世の開墾よってできたものであり，ＳＫ１と同じく城に伴わないといえる。

以上のことを合わせると，本城跡は土橋状遺構と３つの郭をもつ連郭式の山城であったと推定される。防御機能をみると，まずは傍を流れる二河川を天然の堀として利用し，南からの侵入を防ぐことを意識した造りといえ，南側に敵を持つ野間氏の情勢に適っている。しかし，最高所にあり中心的にみえる郭１に切岸が全くみられない点や通路を残した堀切の不完全さ，郭２－３間の切岸の低さなど，実戦を想定するには不十分な構造が目立つ。自然の急斜面を活用した可能性もあるが，全体的にみて防御力は低いといえる。また，平坦面の検出状況から建物等の施設があったとは思えず，規模が小さく平地との比高もさほどないことから，形式は山城を模しつつも簡素な造りの城跡であったといえよう。

次に，本城跡が造営された時期を考えたい。遺物は，ＳＫ１を中心に平坦面２上層やＳＸ２で土師質土器や陶磁器等の破片が出土したが，全て近世以降のものである。土器以外では，平坦面２上層を形成する盛土から出土した粘板岩製の石板１点のみである。類例として東広島市の四日市遺跡[(5)]から出土した石板があるが，当遺跡は近世以降の町跡であり，城跡からの出土例は見当たらない。また，石板の時代的変遷が明確でないため，一概に本城跡に比定させることは難しく，出土した土器と合わせて考えると，平坦面２上層やＳＸ２は少なくとも近世以降に造成されたといえる。それ以外の遺構については遺物がないため，造営時期を特定することは困難であるが，遺構の前後関係から「近世以前には本城跡が造営されていた」とみたい。

では次に，遺構から時期を考えたい。本城跡の遺構は郭と土橋状遺構のみで、比高や規模みて小規模な城跡といえる。中世城館遺跡総合調査を行なった小都隆氏は，城館の構成要素の変遷を明らかにしている[(6)]。その成果によると，小規模な城が存在するのは 14 世紀から 16 世紀前半にかけてであり，16 世紀後半には見られなくなるという。冒頭で述べたように，本城跡は野間氏関連のものといわれており，その野間氏が毛利氏の攻撃によって滅ぼされたのが弘治元 (1555) 年のことである。本城跡と野間氏との関係は後に検討するが，小規模城の消滅時期は史実に合致した傾向といえる。残念ながら，本城跡の場合は傍証するような史料がないため全く推測の域を出ないが，中世における地域情勢を踏まえ，「中世に入って造営されたが，少なくとも 16 世紀後半には城跡としての機能は終わった」ととらえたい。

周辺地形からみる城平山城跡

ところで，現地の周辺地形を見ると，本城跡を先端に配した丘陵は北側にいくほど高くなり，本遺跡から 100 m ぐらいのところで最高点（標高約 209 m）を迎える。頂部には平坦な墓苑[7]が築かれ，そこから北に向かって緩やかな下り斜面となるが，再び宮ヶ迫団地に向かって上り斜面となっていく。頂部の東西は急斜面となっており，墓苑を頂部にした南北に長い半島状の小山地形となる。頂部は古い地図[8]でも長円状の平坦地として確認でき，本城跡以上に視界が開けるなど，城跡の立地条件として妥当性がある。また，頂部の東西斜面には不自然な平坦地形や溝が見られ，頂部を中心とした遺構の存在を感じさせる。

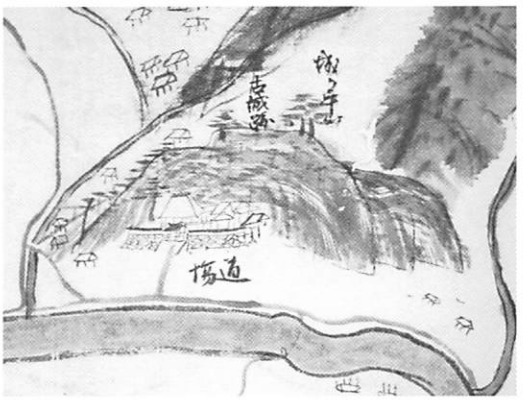
実際に，『呉市史』をはじめとする郷土史の文献や調査レポートには，墓苑のある場所を城跡と見ていた形跡がある。それを裏付けるように，「かつて石垣があった」「瓦がよく出て，投げて遊んでいた」等の話もある。一方，「円福寺の裏山に見張り台の跡らしいものが残っている」との言い伝え[9]もあり，城跡以外の付随的施設を想定していたことがうかがわれ，本城跡がその「見張り台」に該当する可能性も考えられる。

絵図からみる城平山城跡

では，今一度本城跡の実態を明らかにするため，絵図を通した分析をしたい。

本城跡が確認できるのは，19 世紀前半に広島藩によって編纂された地誌『芸藩通志』巻 35 に記載されている絵図と「安芸郡焼山村絵図」（1866 年）である。どちらも簡略的な絵図であるが，二河川の傍に立つ道場（＝円福寺）背後に小山が描かれ，前者では山の中央に「城平山」，その右隣に「古城跡」と記載してある。後者では小山の右上に「城ヶ平山」，その左側に「古城跡」と記載され，「かつて城があった」という当時の認識を裏付けるものとなっている。

ここで，小山の形状に注目したい。両絵図とも小山の西側が微妙に段状になっており，下段の山裾に道場が位置している。簡易的な絵図と云いつつも，丘陵の地形や寺との位置関係をおおまかに再現していることがわかる。さらに，「安芸郡焼山村絵図」では，上段である小山の頂部に古城跡が位置しているのが確認できる（第 9 図）。このことから，絵図を描いた当時も「上段側の頂部」＝「現在の墓苑がある場所」を城跡と認識していたことがうかがわれ，先に地形から推測したことを補強する資料といえる。



第９図　安芸郡焼山村絵図　呉市入船山記念館所蔵

以上のように，絵図の分析や周辺地形から総合的に判断すると，本城跡は城跡の区域から見直す余地がある。すなわち，丘陵頂部に本拠的な施設を配し，丘陵先端に出先施設（本城跡）を設けた二段構えの城跡であったという仮説である。そう捉えるならば，土橋状遺構が本拠への侵入防御を意識したものと見なすことができる。残念ながら，すでに丘陵頂部は開発されている上，他に詳細な記録もないため，現

時点での実態解明は難しいといえる。

史料からみる城平山城跡

次に，史料からアプローチをしたい。『芸藩通志』巻42には「城平山，焼山村にあり」とあり，沢原家所蔵『文化度国郡志』[11]にも「古城跡壱ヶ所，城平山　但シ城主名相知不申候」と記載されていることから，本城跡が近世後期までに城跡として伝承されていた事実が確認できる。しかし，どちらの文献もそれ以外の記述がなく，城主には全く触れていない。

本城跡のすぐ側にある円福寺が所蔵する古文書[12]の「当山世系」の項には，「焼山中務少輔[13]トイエル者，此ノ郷ニ小城ヲ築キ，僅カニ此一郷ヲ領セリ」とあり，この小城が本城に当たると想定されている。焼山中務少輔は同文書で南北朝争乱期の人物とされており，この記述を事実とするならば，野間氏が安芸郡矢野に入る以前から同人物の城があったことになるが，「焼山中務少輔」の名がいずれの歴史文献にも出てこないため，信憑性は低い[14]。ただ，同文書には城構築者と地域中心者の連綿性，地域中心者と円福寺の深い関係についても記述[15]されており，実際に城平山頂部の南側には墓苑造営以前から円福寺有縁の墓地が存在する。また，町の中心的な神社である高尾神社[16]も「もとは宮ヶ迫にあった」との言い伝え[17]があり，城・寺・神社の密接な関係が想像[18]される。このようにみていくと，本城跡は単に「地域の中央に位置し，円福寺や高尾神社が近くにあった」のではなく，地域住民の精神的な拠り所である寺社と深い結びつきをもった実質的な地域の中心地といえ，地域の有力者と関わりの深い施設であった可能性がある。

周辺城跡から見る本城の役割

では，現在の地域史における本城跡の位置づけはどうなのか。先述したように，本城跡は政治情勢からみて「野間氏の城の１つ」として位置づけられている。15世紀中頃，矢野に入部した野間氏は，矢野城に本拠を置きながら呉地域の西部へと勢力を拡大し，焼山もその支配域に組み込んでいる。区域内には，軍事機能が高い掃部城，館があったといわれる城山，埋蔵金伝説のある陣山城，野間氏最後の合戦地と伝わる茶臼山城など，野間氏伝承と共に数多くの城跡が伝えられている。これら野間氏系の城には城塞網の存在が唱えられており[19]，本城跡も交通の要衝に位置するだけでなく，見晴らしがよいため遠方を望むことができる。ここで，ネットワークの視点から本城跡の意義を検討してみたい。

まず，本城跡から東に望む神山は，呉から焼山・天応へと抜ける主要道[20]が通っており，野間氏にとっては呉との境目となる重要な場所である。もともと「陣ノ山」と呼ばれ，武具に因んだ地名が残っていることから，「陣山城」の存在が想定されている場所でもある。

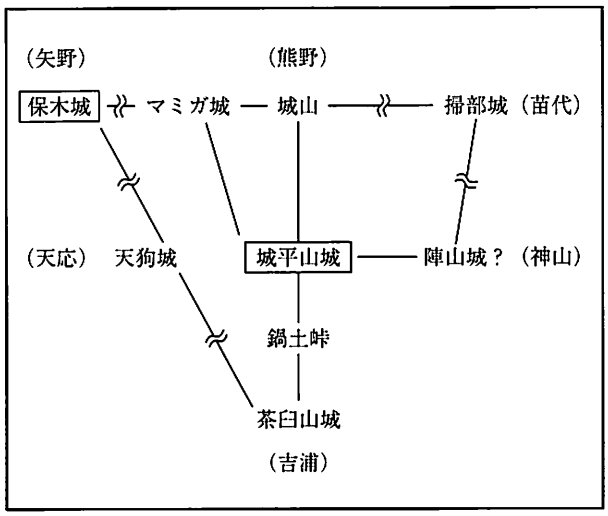
次に吉浦方面であるが，茶臼山城は山影に隠れて確認できない。しかし，山々の間に鍋土峠にある小高い墓苑を垣間見ることができる。ここは茶臼山頂を覗くことができる格好の場所であると共に，呉との境界線ともなっている。また，この辺りには「正蓮坊」[21]の存在が伝えられており，野間氏の情報網として機能していたと想像される。

天応方面では，沿岸部の山々に見張り台としての城跡が想定されているが，茶臼山城と同様に山に隠れて見えない。ただし，こちらは天応―坂―矢野と海伝いに保木城へつながる「沿岸ルート」が存在している。また，本城跡は天応への通路に面している。

熊野方面では，やや小高い位置にある城山との連結が想定される。野間氏にとっては熊野との境であり，重要な場所といえる。城山からも神山方面を望むことができるが，距離としては少し遠い感がある。本城跡は，やや角度はずれるものの両者の中間的な場所に位置しており，中継地点とみることができる。城山からは古絵図に伝わるマミガ城が目と鼻の先であり，その背後には絵下山，そして保木城が控えている。

このようにみていくと，右図のような城塞網が見えてくる。すなわち，眼下を通る天応への交通路を押さえつつ，本城跡が焼山の中心に位置するという利点を生かし，呉･吉浦･熊野を結ぶ城塞網の中継地点として機能していたことが想定できる。郭１の北東斜面で確認した焼土は，次の城に連絡をするために火を灯した痕跡の可能性もある。

以上の検討を踏まえると，本城跡を野間氏の城塞網の１つと位置づけることは妥当であるといえよう。



第 10 図　野間氏城塞網想定図

本城跡の性格

本城跡は，堀切や平坦面の造りなどが不十分で，防御機能が低い。また，出土遺物がほとんどなく，建物跡らしきものもないことからも，いわゆる永続的な施設と考えられない。しかし，県内には記録や地図にない城跡や本城跡のような明瞭な郭をもたない小規模な城跡も多く，県教育委員会による中世城館遺跡総合調査でも，小規模で軍事機能が高いといえない城跡が数多く分布する実態が明らかになっている。先述の小都氏は，県内のさまざまな城跡を多角的に分析･分類し，小規模城の実態解明を試みている。[22] その考察をもとにしながら，本城跡を検討してみたい。本城跡の特徴をまとめると，次の点が挙げられる。

① 小規模であり，麓の集落との比高も小さい
② 建物の痕跡がなく，出土遺物が極めて少ないため，生活感がない
③ 軍事機能が不十分である
④ 神山（呉），熊野，天応，吉浦へと分かれる交通の要衝に位置する
⑤ 焼山を見渡すことができる

これらのうち，①～③は小都氏が言うところの「砦」の要素に該当する。ただし，本城跡の場合は④・⑤のように交通の要衝に面して見晴らしもよく，他の山城とのネットワークが十分に考えられ，その意味では「出城」の要素ももっているといえる。

ところで，小都氏は，小規模城が「郷村内の土豪や有力農民を中心とした小村落を単位とした施設」であり，「臨時的な共同施設」であった可能性が高いと指摘している。本城跡も，城主に関する伝承や寺社との結びつきから，地域住民との強い結びつきを感じさせる。城平山頂部に寺の墓地がつくられていることも，地域住民が利用する共同施設としての性格が引き継がれた可能性をうかがわせ，「村の城」としての側面も見られるといえよう。

結論

本城跡は，不完全な構造や防御機能の低さから，軍事機能を備えた山城を想定することは難しい。しかし，伝承や史料からみて何かしらの施設があったことは確実であり，周辺の城跡との位置関係や立地条件からみて，野間氏の城塞網の１つに含まれていた可能性は極めて高いといえる。城の築造に関わるとされる「焼山中務少輔」の正体や野間氏との関係は現段階では明らかにできなかったが，丘陵頂部に関する一連の事実を踏まえると，本城跡は円福寺や高尾神社と所縁ある村の有力者に関連した地域的な施設であり，その後丘陵頂部に野間氏と関連した城が築かれ，最終的に野間氏の城塞網の１つに組み込まれていった可能性もある。全てが推測の域を出ないが，野間氏の時代あるいはその前後の時期に，見張り台としての役割を主目的とし，形式を模倣して簡素に造られた砦（または出城）であり，立地を最大限に利用した城砦ネットワークの１つとして機能したと結論付けたい。呉市においては数少ない発掘事例であり，考古学的視点から呉市域の歴史にアプローチする格好な資料であるとともに，野間氏の実態や小規模な城の形態などを探る上で良好な資料の１つといえよう。

註

（１）平成元～７年に広島県教育委員会が県内で行なった調査。その成果を『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第１～４集（1993～1996年）としてまとめている。

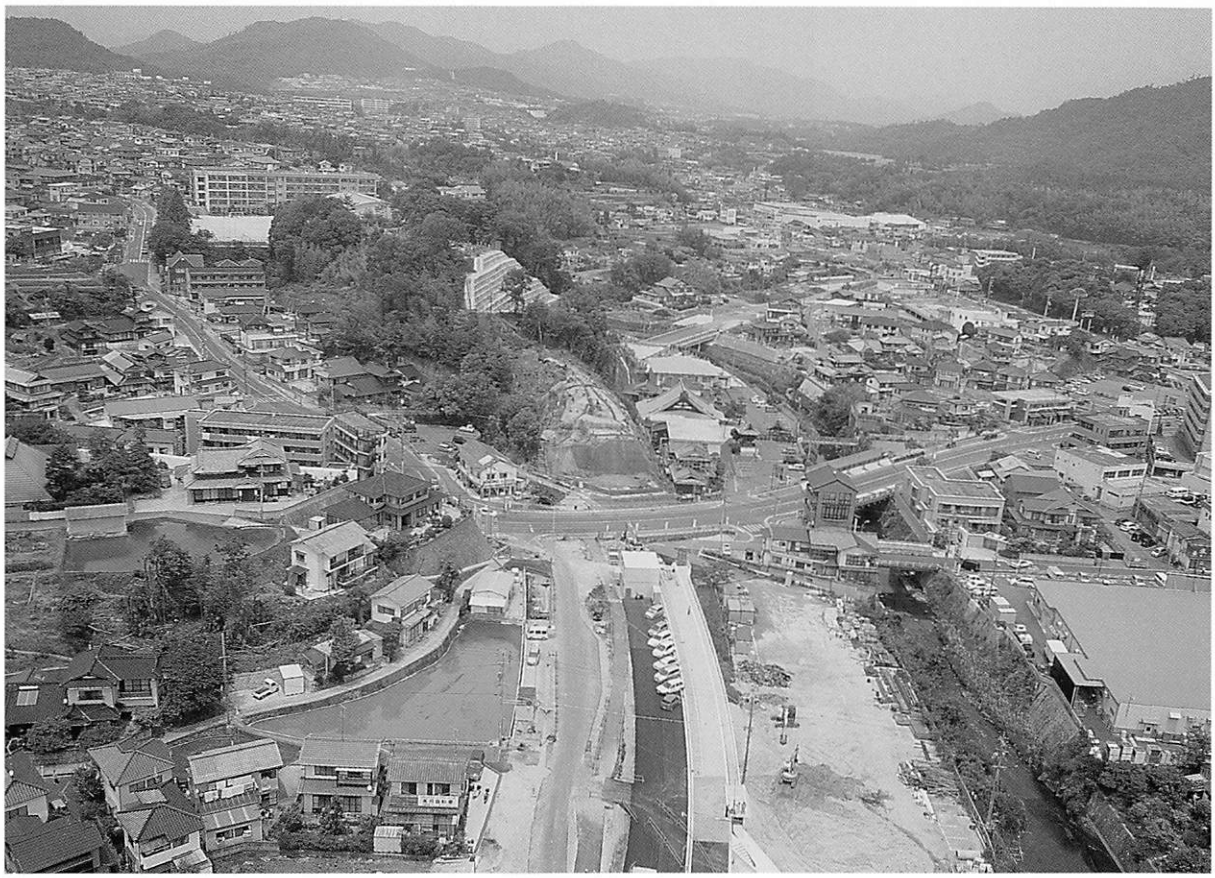
（２）中世城館遺跡総合調査では，70を超える城跡で土橋を確認している。ただし，これは地表観察によるもので，土砂流入などで土橋状になっている可能性もあり，すべてが土橋であるとは断定できない。そのような可能性を踏まえた上で土橋の形態を調べたところ，土橋を堀切の片側寄りに設けていたのは，鷹巣城跡・大道城跡・滑山城跡・大床山城跡の４例のみである。文章で述べたように，調査した城跡でも同様の土橋は僅少で，県内においては土橋を中央に設けるのが一般的な傾向といえよう。
先の４例を詳しくみると，鷹巣城跡と滑山城跡の土橋は郭間を連結するもので，大床山城跡の土橋は上方にある郭群へ続く最下段の堀切に位置する。それに対し，大道城跡の土橋は最高所の郭から背後の丘陵へと繋がるもので，本城跡に最も類似する。ただし，これらの城跡は規模や比高の大小があるものの，いずれも本城跡より軍事機能を意識した構造となっている。

（3）広島市教育委員会『三ツ城跡発掘調査報告書』1987年
（4）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『福原城跡』2003年
（5）財団法人東広島市教育事団『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ－第1～4次調査－（本文編）』2004年
（6）小都隆「発掘資料から見た城館の編年と分類」『芸備』第28集　芸備友の会　1998年
（7）城平山北側の丘陵に宮ヶ迫団地を造成する際に，地域に散在していた墓地を集めて新たに墓苑とした。
（8）国土地理院が大正14年に測図した25,000分の一地図を参照した。
（9）中邨末吉『呉及び其の近郷の史実と伝説』第四輯　1980年
(10) 慶応2(1866)年に作成されたもので，他の「村絵図」に比べると，かなり正確に記されている。現在，この絵図は呉市入船山記念館に所蔵されている。
(11) 呉市役所『呉市史　資料編　近世2』1999年
(12) 古文書の成立年代から類推すると，『前太平記』を受けて城主伝承が生まれた可能性もある。
(13) 古文書によると，焼山中務少輔は『前太平記』に藤原純友の配下として活躍がみられる焼山藤九郎（藤原純友を追討軍から救うなど活躍するが，最終的に和睦の立役者となって騙し討ちに遭い，筑前黒崎で戦死している。なお，『前太平記』では焼山父子として登場するが，同文書では兄弟となっている）の末葉であり，南北朝争乱の中で南朝方・児島高徳に属し，興国元(1340)年に京都で戦死したとされる。
(14) 児島高徳自身の実在性も疑問視されているため，古文書の信憑性は低く，「中務少輔」という名前も誇張を感じる。ただ，鎌倉時代以降に武士たちが自らを格付けするために官位を名乗ることが流行った情勢を鑑みると，ある意味で時代に合致しているともいえる。また，かつて呉は鳥羽法皇の皇室領で，その後美福門院さらに八条女院と伝領されており，以後は石清水八幡宮領「呉保」となっていくが，矢野と同様に大覚寺統（南朝）との関わりが深い地域といえる。矢野の熊谷蓮覚や呉を根拠にした南方安親に代表されるように，呉地域は南朝方に付いた人間が多かったと考えられ，南朝方の武将で知られる児島高徳を引用しているところをみると，何らかの歴史的事象を反映しているともとれる。
(15) 同文書によると，焼山中務少輔に引き止められた旅僧・住心が真言宗の寺として円福寺を開いたとあり，時と共に衰退していたところを，風呂家から出家した円了が浄土真宗の寺として改宗・再興したとされている。この風呂家は焼山中務少輔の末葉で，代々「風呂九郎左衛門」を名乗った焼山の中心者といわれている。なお，円了が登場した時期は，伊予から来住した河野氏の一族・土井氏が焼山の中心者に取って代わった時期とほぼ一致する。
(16) 掃部城跡の近くにも「多賀雄神社」があり，「鷹雄神社」の異名もある。掃部城も「鷹城」と呼ばれており，野間氏の菩提寺といわれる「鷹護寺」も含め，野間氏の周辺には「鷹」にまつわる名前が多い。なお，野間氏が入部前にいたとされる尾張の知多半島も「鷹」との関わりが深い地域である。
(17) 高尾神社が宮ヶ迫から現在の地に移転された時期は，先述した円了の登場や土井氏の台頭と前後する。なお，同じ頃に寺屋敷の後堂（密教寺院の後身）が矢野の平野部に改宗・移動，吉浦では野間氏の菩提寺といわれる大福寺・千丈寺・広寂寺の真言宗三寺が廃寺となっている。焼山中心者の没落・高尾神社の移転・真言宗寺院の改宗又は消滅。これら一連の出来事は，野間氏の滅亡と連動しているようにもみえる。
(18) 城平山を中心に，城と寺と神社が一体化していたという説もあり，事実，円福寺の家紋や建物などに神仏習合の痕跡や伝承がある。
(19) 矢野町『広島県矢野町史　上巻』1958年
　そのほか，『呉の歴史』をはじめとする郷土文献や古文化の会が現地調査をまとめた「呉市の古代―中世遺跡分布図」，野間氏を研究した淀屋卓二氏の論文等で提唱されている。
(20) 現在の呉平谷線が呉～焼山間の主要道路となったのは戦後のことで，それ以前は神山を経由する道が呉と焼山を結ぶ主要道路であった。焼山村の古地図では呉から神山峠を越えて矢野に抜ける道を「呉街道」と記述し，明治32年測量の5万分の1地図でも神山峠に（呉峠）と書き添えているなど，かつて主要道だった痕跡がうかがわれる。
(21) 淀屋卓二「野間氏の伝承　その4」『ふるさとよしうら』第32号　吉浦郷土史研究会　1990年
　正蓮坊は鍋土峠の手前東方にあるとされるが，厳密な場所はわかっていない。ここは，茶臼山城からみて「丑寅」の方角（鬼門）に当たる。この方角は城にとって不吉とされ，鬼門除けとして社寺を建てることがある。ちなみに城平山城にとっては，高尾神社がそれに当たるとの説もある。
(22) 小都隆『中世城館跡の考古学的研究』渓水社　2005年

参考文献

円福寺所蔵古文書 1834（天保5）年
芸備郷土誌刊行会『復刻　芸藩通志』第2巻　1973年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』2002年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『福原城跡』2003年
広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第1集　1993年
広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第2集　1994年
新人物往来社『日本城郭大系』第13巻　1980年
呉市役所『呉市史』第2巻　1959年
呉市役所『呉市史　資料編　近世2』1999年
呉市役所『呉の歴史』 2002年
呉市役所『呉の歩み －呉市制100周年記念版－』2002年
呉市入船山記念館『館報 入船山』第6号　1994年
小都隆『中世城館跡の考古学的研究』渓水社　2005年
下向井龍彦「中世の呉」『館報 いりふね山』創刊号　呉市入船山記念館　1986年
上河内良平『大内氏分国　安芸･東西条始末記』1980年
中邨末吉『呉及びその近郷の史実と伝説』第4輯　1980年
宇吹栄人『郷土史　ふるさと焼山』1984年
古文化の会「呉市の古代―中世遺跡分布図」1985年
呉市昭和西公民館 婦人ボランティア学級「昭和地区郷土資料集」1981年
吉浦郷土史研究会『ふるさとよしうら』第32号　1990年
矢野町『広島県矢野町史』上巻　1958年
小林浩治『目で見る矢野町史　社寺編』1983年

図　版

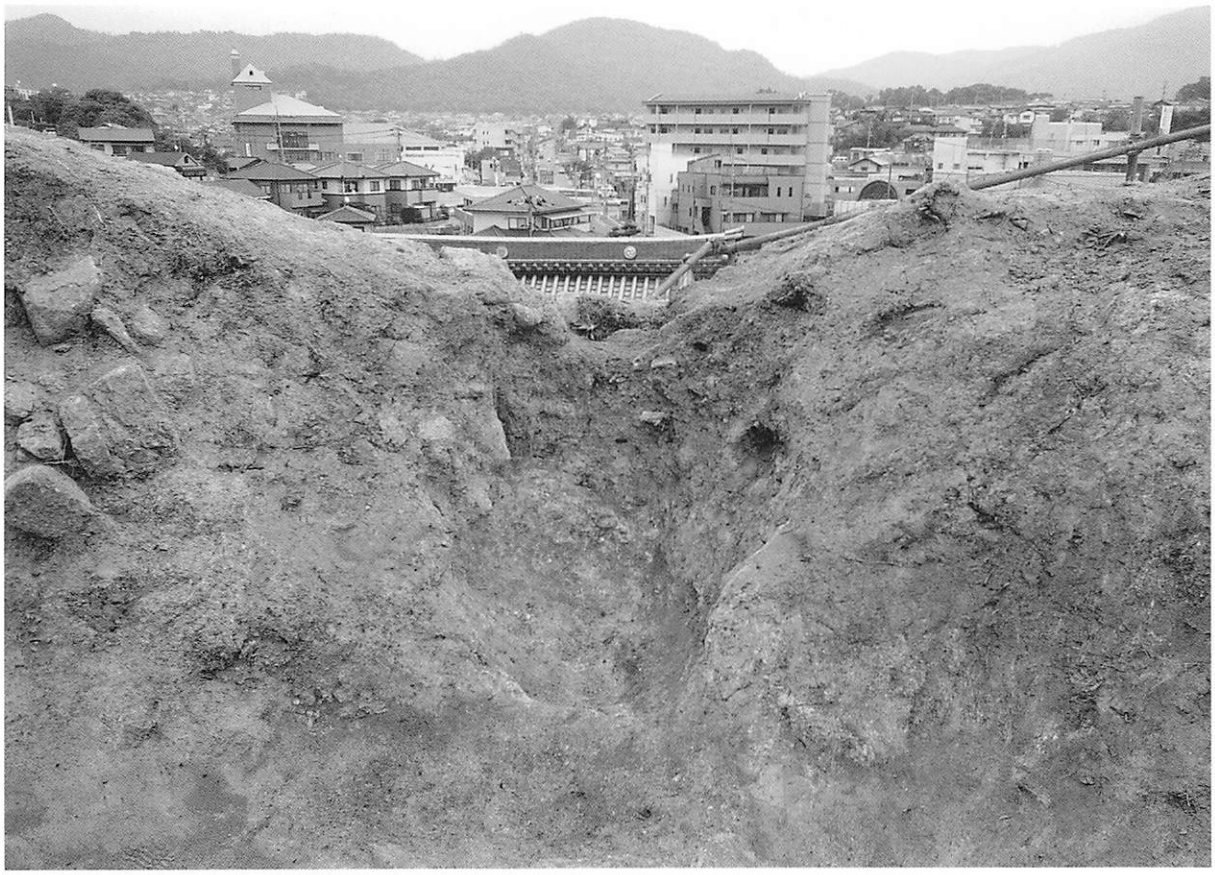


a　遠景（南上空から）

b　遠景（東から）

a　土橋状遺構調査前（西から）

b　土橋状遺構・ＳＸ１（西から）



a　ＳＸ１（西から）

b　土橋状遺構調査風景（北西から）

図版４

a　平坦面１調査前（南から）

b　平坦面１（南から）

a　平坦面２調査前（南西から）

b　平坦面２上層（南西から）

図版６

a　平坦面２上層（南から）

b　平坦面２下層・ＳＸ２（南から）

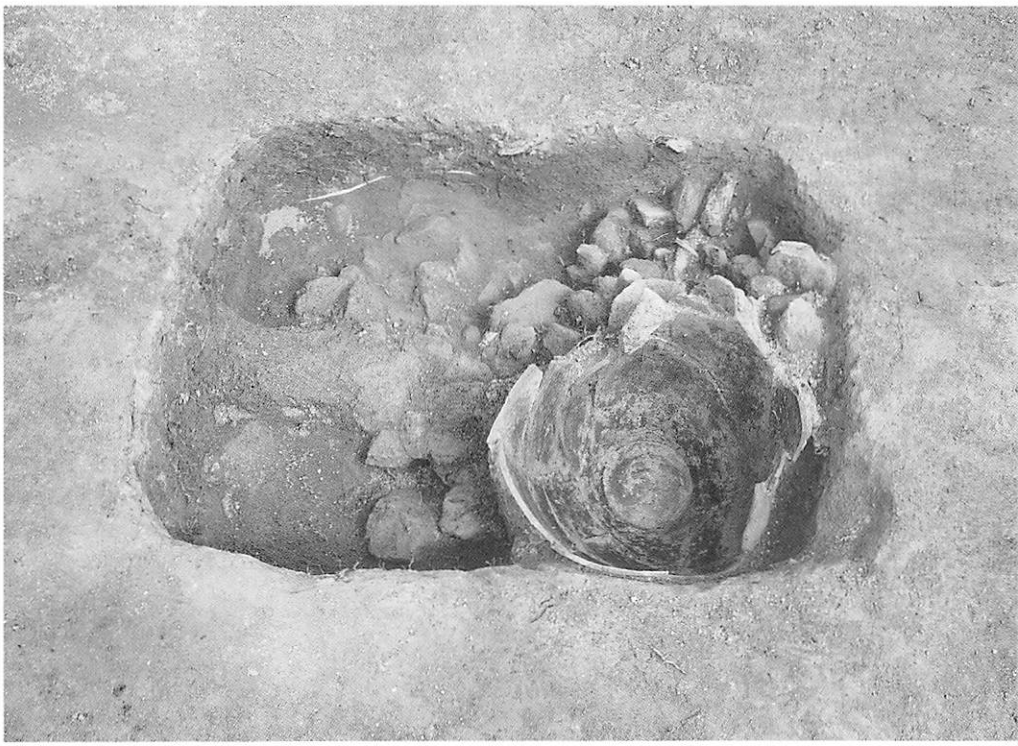
a　平坦面３調査前（北西から）

b　平坦面３（北西から）

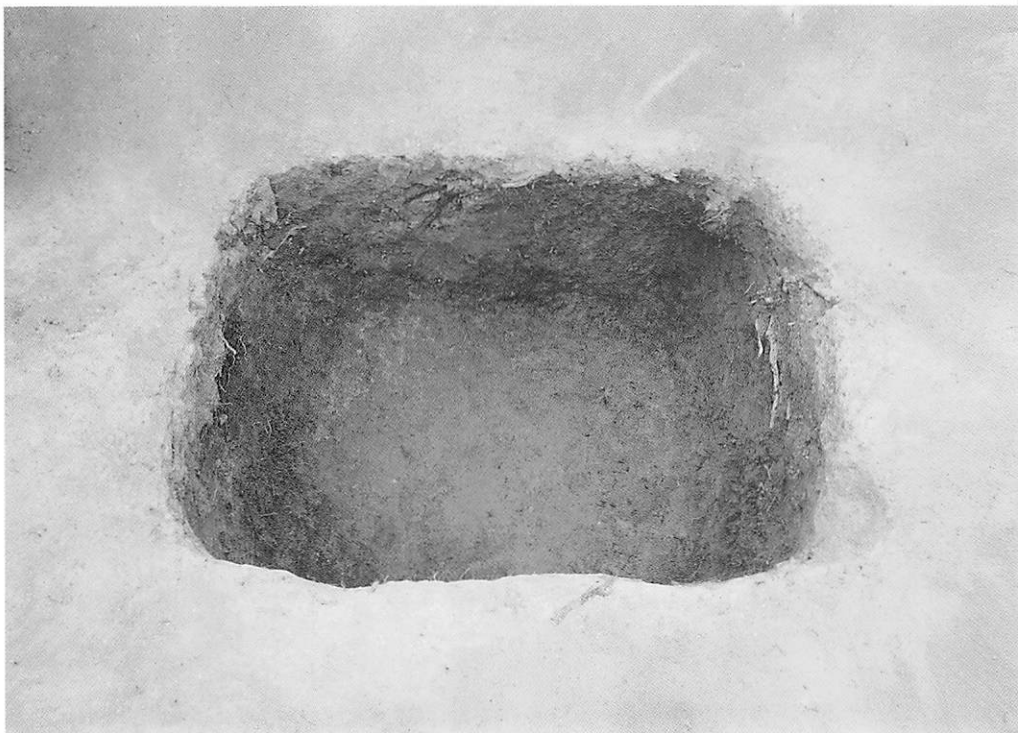
a　平坦面４調査前（南東から）

b　平坦面４（南東から）

a　ＳＫ１土層断面(北西から)



b　ＳＫ１遺物出土状況
(北西から)



c　ＳＫ１（北西から）

a　平坦面２出土遺物

b　同左（裏側）

c　ＳＫ１出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	じょうひらやまじょうあと
書　　名	城平山城跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第29集
編著者名	山澤　直樹
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号　TEL 082-295-5751
発行年月日	西暦2009年3月19日

ふりがな	ふりがな		コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地		市町村	遺跡番号					
城平山城跡（じょうひらやまじょうあと）	広島県呉市焼山西三丁目（ひろしまけんくれしやけやまにし）		34202	34202-94	34度17分46秒	132度33分16秒	20070416～20070528	810	都市計画道路焼山押込線街路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
城平山城跡	城跡	中世～近世	平坦面，土橋状遺構，土坑		石板，土師質土器，陶磁器				

要　約	城平山城跡は，二河川の西側丘陵の尾根上に立地する。周囲との比高は約15ｍで，焼山の町を見渡すことができる。東は郷原，西は天応，南は呉・吉浦，北は熊野へ通じる交通の要衝に位置し，特に天応へと通じる道は眼下を通る。調査の結果，４つの平坦面，土橋状遺構１，土坑１，性格不明遺構２を検出した。平坦面は最高所に平坦面１があり，南へ順次並ぶ。平坦面２は，二度にわたる造成が確認できた。平坦面３は最も広く，平坦面４は最下部にある。土橋状遺構は，平坦面１の北側背後を堀切状に掘り込みつつも東側に通路を確保したものである。出土遺物は近世の土器類が大半を占め，ほとんどが土坑から出土した。遺物の出土状況から平坦面４と土坑，性格不明遺構の１つは近世以降の造成といえる。その他の遺構には遺物がほとんどなく，城に伴う建物等の痕跡もないが，交通の要衝に位置していることから見張りを主目的とした臨時的な施設であったと考えられ，小規模城の様相や村落の歴史を考える上で参考となる資料である。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第29集

城平山城跡

発行日　平成21(2009)年3月19日

編　集　財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

〒730-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL（082）295-5751　FAX（082）291-3951

発　行　財団法人　広島県教育事業団

印　刷　株式会社　インパルスコーポレーション